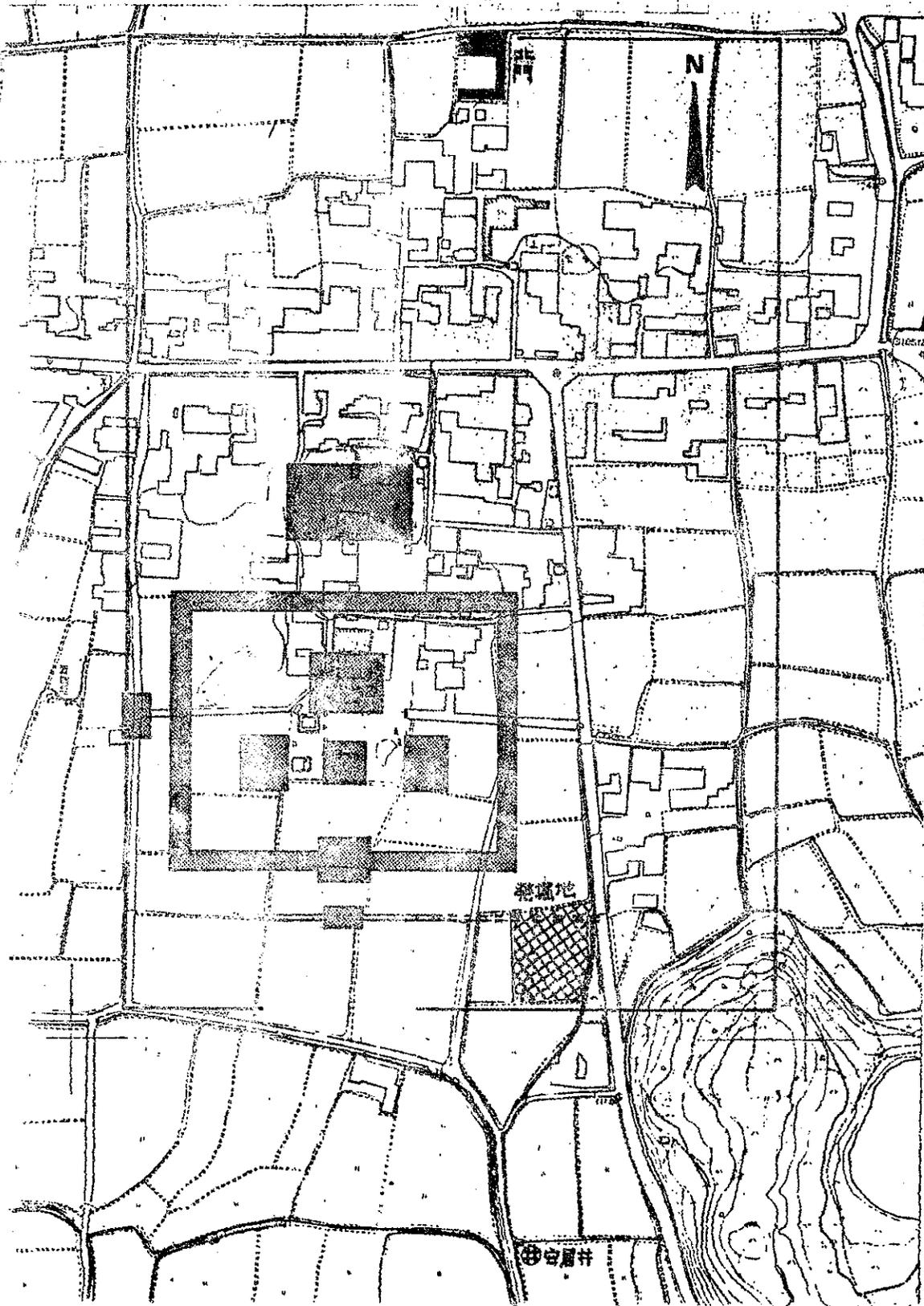


飛鳥寺発掘調査現地説明会資料

1979年3月16日 飛鳥藤原宮跡発掘調査部



この調査は史跡飛鳥寺跡の現状変更申請に基く調査として昭和54年1月10日から行われた。発掘区は、飛鳥寺の東南隅に位置し、南門から東へ伸びる築地部分とその南の区域に位置する。発掘面積は約900㎡である。検出した主要な遺構は、築地1、掘立柱建物2、塙3、素掘溝6、石組溝2、石列5、木樋1、土塚1である。遺構は重複関係と出土工器から4時期に大別できる。

I期

斜行石組溝SD01は、幅30~50cm、高さ50~70cmの大型の石を縦に1段並べた内径1.2mの溝である。発掘区北半15m分を露呈させたが、南半では総柱の建物SB10を保存するため、発掘区南端でその存在を確認するに留めた。

斜行石列SX02は、30×30cm~15×20cmの玉石を2列並べ、その西側に高さ30cmの見切石を立てる。南北9mを検出し、北側には土塚状の窪みによって削平される。

南北石組溝SD03は、4~5段に石を積み上げた内径1mの溝である。最下段は70×30、50×50cmの大型の花崗岩を用い、2段以上は40×20、15×10cmのやや小形の花崗岩の他に、凝灰岩切石を混える。溝の埋め土は2層に分れ、北端では下層が西へ屈曲し、東西素掘溝SD04に繋がり、上層は東へ屈曲し、東西素掘溝SD06に連結する。下層から7世紀前半の土器と出土している。これらSD01・SX02・SD03・SD04は今回発掘中最も古い遺構である。SD01・SD03下層からは瓦と出土している。

築地SA05の背面玉石列は、飛鳥寺創建当初のものと思われるが後述する。

方位の振れは、SD01・SX02が北で東に10~20°の方向を示し、飛鳥寺南門南方の石敷広場北縁の振れ(7°58'50")と直交する線に類似する。

II期

掘立柱建物SB10は、2×2間の総柱の建物で、柱間は9尺等間である。柱の配置から看ると倉と考えられる。西側には建物を画する如くに玉石列SX11が並ぶ。またその西北には、首暗渠状の石の施設SX12が存在する。

掘立柱建物SB13は、3×2間の東西棟の建物である。現状では柱位置に乱れがみられ、なお検討を要する。

東西塀SA08は築地心より南6mの位置にあり、8尺等間で11間分を出土した。斜行石組溝SD01(7世紀前半)より新しく、後述の南北溝SD16上層より古い。

東西塀SA09は築地心より南17.5mの位置にあり、8尺等間で11間分を出土した。斜行石組溝SD01・南北石組溝SD03より新しく、後述の南北溝SD17(7世紀最終末～8世紀初頭)より古い。

南北塀SA07は、9尺等間で3間分を出土した。柱間寸法が異なるがSA09の柱と柱列が揃うので、同時に存在した可能性が高い。

南北素掘溝SD14は幅1m前後の素掘りの溝で、深さは50～70cm。底部は幅25cmでさらに1段下がっており、所々に小石が点在する。7世紀前半の土器が出土している。

木樋SX15は南北26m分を出土した。北方ほどやや低くなる。この木樋は幅約1mの掘方と掘り、さらに底部を1段掘り、木樋を置いた後にも粘土で固めている。木樋身の1本の長さは6～12mで、外径は16～23cm、内径は10cm前後である。断面で見ると、外側は逆台形、内側は溝と円形に削り抜く。木樋蓋は厚さ5～10cmで溝上部に落とし込む形式である。

東西溝SD06は、幅1mの素掘りの溝で、南北石組溝SD03-B(上層)と連結する。溝内から7世紀後半の土器を出土した。この東西溝はさらに北へ屈曲し、南北溝SD16下層となって、築地の下へ入る。

Ⅲ期

南北溝SD17は、幅約1mで、南北18m分を出土した。砂とパラスを含む浅い溝で、北側は削平されて消失する。7世紀最終末から8世紀初頭にかけての土器を含む。

南北溝SD16-B(上層)は南北溝SD16-A(下層)より幅をせばめ、築地に近接する部分では両側に花崗岩の玉石を並べる。この溝は、築地部分では上部に1×1.7m、1.7×0.75

mの2枚の大石を並べ、その下に暗渠として通る溝となる。

築地SA05は正面玉石列と背面玉石列とで囲まれた幅2.5mの部分で、昭和32年の南門地区の調査では築地の厚さを約1.5mに復原している。背面玉石列は地盤が低く、創建当初の可能性が高いが、先の調査の石敷雨落とは異なっており、なお検討を要する。正面玉石列は石列の下に瓦を含み、部分的には焼土と混ざっており、後に補修したものであろう。

Ⅳ期

SK18は、発掘区の西北に広がる土坑で、上層から瓦器が出土している。

以下では調査で判明した遺構の性格について説明しておく。

① この地域ではまず飛鳥寺伽藍の南限として築地が造られている。この築地は、その後改造を受けていて、現状では背面玉石列しか当初のものが残っていない。この築地が造られたのは飛鳥寺創建時のことと思われる。そのころは築地南は空閑地であったようであり、伽藍地内への導水路としてSD01などが存在している。

② 第Ⅱ期の遺構として総柱の建物SB10と掘立柱塀SA08が特記される。飛鳥寺の寺域は、東西2町×南北2町に復原されたが、昭和52年の発掘によって寺域は北方へのび、南北3町と確認された。この3町は、飛鳥寺南門南方の参道と石敷広場北縁の交差点を起点とするのが最も合理的である。即ち今回発掘した区域は、飛鳥寺寺域内にあると考えられる。これは、今回出土の掘立柱塀SA08の振れが東でやや北に振れ、飛鳥寺の振れと一致し、飛鳥板蓋宮伝承地の遺構の振れと異なることとも合わせて考える必要があるであろう。

7世紀中葉において、南門から東へ入る築地の南で、一本柱の塀(SA08)より空閑地が画され、さらにそれを細分するようSA07・SA09の塀で区画される。この区画内に総柱の建物SB10(倉)が建てられ、その倉を中心として溝の流れがSD04からSD06へ変えられたと考

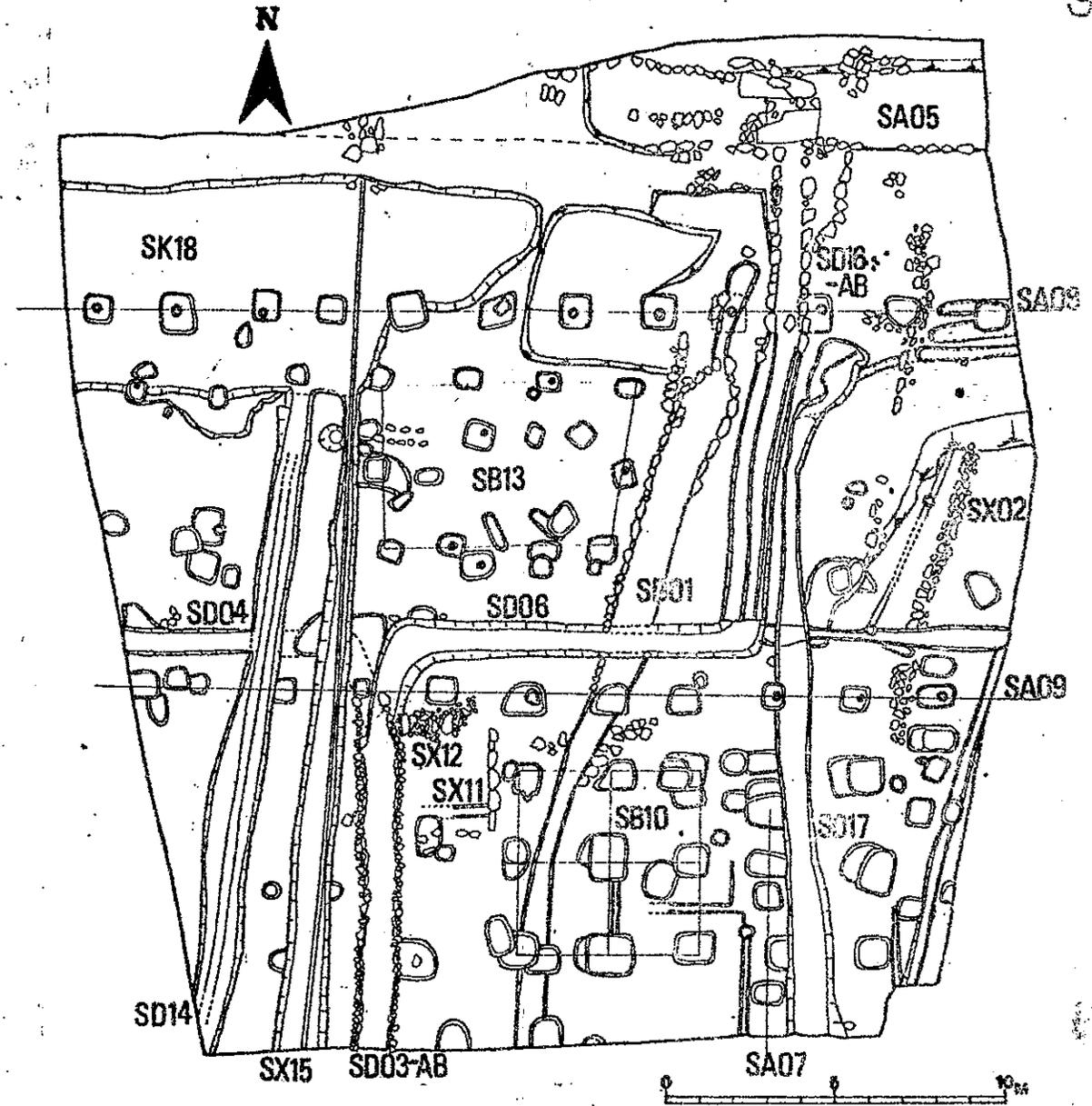
えられる。

ここで想起されるのは『続日本紀』の道昭の禪院、『三代実録』の道昭の禪院寺であり、後者はその創建の「本元興寺東南隅」において「壬戌年」（天智元年）にあると記している。当発掘区は飛鳥寺の寺域の東南にあたりと考えられるから、SB10は飛鳥寺東南隅に位置した禪院に關係するものと思われる。

③ 次に、今回検出した木樋が注目される。木樋は初め、その西側にある南北素掘溝SD14に設置してあったものと東へ置き換えたようである。そして北方へ行くにつれて低くなるので、飛鳥寺へ向って流れる上水施設であることは疑いない。そして、その流路については、今回の発掘区の南方約100mで昭和46年に奈良県教育委員会が発掘した木樋との関連を考へさせる。ただ、この木樋は断面台形の下上2枚合わせで構造が異なること、最大幅が45cmあり大形であること、そして方位の振れなどを考慮すると、直ちにこの木樋が今回検出した木樋と連結するとは言えない。近接する「寄居井」（カナヤ井）との関連も併せ考へるべきであろう。

④ 最後に、築地SA05に關連して大形の石を2枚使った暗渠の遺構と、その南方の溝との関連が重要である。細部補足調査前であるから確言できないが、7世紀前半の斜行石組溝SD01、7世紀後半の素掘り南北溝SD16-A（下層）、8世紀の石組溝SD16-B（上層）のそれぞれの流入口に築地下の暗渠がなっていると考へられ、当初の位置をほぼ踏襲しながら何度か改造されたものであろう。このような頻繁な改築は、飛鳥寺とその南方域が7世紀において密接な關係にあったことを示唆し、飛鳥寺と一連のものであることも物語るものといえよう。

なお、本調査は今回の現地説明会後に実測・細部補足調査も行って、さらに精査を加える予定である。



<参考史料>

- 壬戌年（662） 禪院を本元興寺の東南隅に創建する
- 文武4年（700） 道昭、禪院で物化
- 和銅4年（711） 弟子等が奏聞して禪院を平城京に移建する
- 文武4年3月10日条（続日本紀）

此、院ニ經論多ク有り。書述階好ニシテ並ニ錯誤アラズ。皆和尚、将来スル者ナリ。